



認定看護師（CN）による公開セミナーを開催し、地域医療機関の看護師の皆様と一緒に看護技術について理解を深めたことは本誌「かざぐるま」でもご紹介させていただきましたが、市立札幌病院では医師を対象とした研修会も開催されていますので、今回は、その一つである「緩和ケア研修会」を紹介させていただこうと思います。

### 政府のがん対策の一環として

がん治療の初期段階から緩和ケアが提供されることを目的に、医師に対する緩和ケアの基本的な知識等を習得するための研修会開催指針が平成20年4月に厚生労働省から示されました。

厚生労働大臣から「地域がん診療連携拠点病院」の指定を受けている当院も準備を進め、緩和ケア研修会は道内拠点病院のトップをきって平成21年2月に1回目の開催となりました。

がん治療で長年、地域の患者さんと向き合っている多くの医師に参加していただきたいという思いから、毎回、連携医療機関の皆様にご案内していますが、昨年11月の3回目の研修会は問い合わせが多く、残念ながら皆様へのご案内することなく定員に達してしまいました。

受講したのは医師31名、看護師7名、薬剤師2名、作業療法士1名、言語聴覚士1名の計42名。講師陣は道内がん拠点病院や在宅ホスピスに関わる医師で、院外から8名の協力を得て開催しました。

### 研修はより現実的に

2日間で延べ720分以上にわたる研修は主催する側、受講する側双方に体力と気力が必要なのは毎回感じています。院内から参加したある医師は、研修会1日目の深夜に病棟で患者さんを看取り、2日目朝9時からの研修に臨んでいました。

数年前、某テレビ局で緩和ケアを副材としたドラマが放送され、一般家庭でも緩和医療の一端を見る機会があり、感慨深く視聴していた医療者も多かったと思います。研修会では図のようなプレートを掲げ、その場で渡されるシナリオに基づき役になりきって進めるプログラムがあり、まさにドラマさながらの風景でした。しかし、静寂の中で真剣に役作りをする参加者の姿を見て感動する私がそこにいました。



左：プレートをつけて、役になりきります。

右：ワークショップでは活発に意見交換が行われました。

研修会のプログラムも回を重ねるごとに進化していきます。開催初期の研修会で浮かび上がる問題点を参加者全員の協力の下一つ一つ解決し、その経験が活かされています。現在、道内にある20箇所の「地域がん診療連携拠点病院」でも研修会が続々と開催され、各地の研修会運営に携わる講師陣のファシリテート技術も向上していますので720分の研修も短く感じるかもしれません・・・。

### コミュニケーションを重視

研修では日本緩和医療学会が中心となり、日本サイコロジ学会の協力を得ながら作成した教育プログラム（日本緩和医療学会PEACEプロジェクト）のモジュールを使用するのが一般的です。講義一辺倒ではなく参加者が、医師、患者、患者家族の役になりきり、がん告知を受ける場面の体験を通じてお互いの立場を理解し、意識改善していくプログラムや、地域の医療者が連携して、がん患者さんの在宅療養に向けた支援のあり方を小グループで検討するワークショッププログラムが用意されています。

これは、がん患者さんの意向に沿ったがん診療を行うことに重点を置いている研修ならではのプログラムで、初めて経験する医師も多かったようです。

チーム医療の観点から医師以外の多職種が参加する緩和ケア研修会が多くなり、ワークショップの事例検討では、より現実的な内容で研修が行われています。

